

被害が著しいネギハモグリバエの発生

1. 発生の経過

平成29年頃から、京都府の露地栽培のネギにおいて、ネギハモグリバエにより圃場全体が白化する現象がみられた。

京都府は、本年度、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構、東北農業研究センターに依頼し、mtCOI 領域の塩基配列による解析を行った結果、従来の遺伝子型とは異なる遺伝子型（以下、別系統と略記）の発生を全国で初めて確認した。

その後、国内における別系統の発生は、茨城県、富山県、千葉県、長野県、埼玉県、新潟県、栃木県、三重県でも確認されている。

近年、本県でもネギハモグリバエによる大きい被害が報告されていることから、既に別系統が発生している可能性が高い。

2. 被害

幼虫が葉中に潜り込んで食害し、食害後は白い筋状の潜孔を形成する。従来の食害は1葉あたり1～数頭で加害するのに対し（写真1）、別系統は1葉あたり複数頭の幼虫で集中的に加害する傾向がある（写真2）。

このため被害症状は、白い筋状の潜孔が大きく、特に葉先の白化・枯死により生葉数が減少するなど、従来の被害と異なり著しい被害になりやすい。



従来の被害(写真1：富山県提供)



別系統の被害(写真2：富山県提供)



別系統による被害の様子(写真3：富山県提供)



ネギハモグリバエ成虫
(写真4：富山県提供)

3. 形態および生態

ネギハモグリバエの従来系統と別系統は、形態による識別が困難である。両系統とも成虫の体長は約2mmであり、胸部と腹部が黒く、その他の部分は淡黄色である。幼虫はうじ虫状で、成長すると体長約4mmに達する。蛹は体長約3mmの褐色、俵状である。

両系統とも成虫は葉の組織内に産卵し、孵化した幼虫は葉の内部に潜り込んで葉肉を食害する。幼虫は成長すると葉から脱出し、地表または土中で蛹となる。

4. 防除対策

今のところ、従来系統との薬剤抵抗性の差異は聞いていないので、防除対策には、これまでの系統と同様である。

早期発見に努め、被害葉を取り除くとともに、発生初期の防除を徹底することが重要である。

被害葉及び収穫残さはネギハモグリバエの発生源となるので、圃場内に放置せず、1カ所にまとめてビニール等で覆い、裾部分を土で埋める等適切に処分する。